

◎発言

白石 隆
京都大学教授

米「帝国」の狙いと 世界の「アメリカ化」

——中産階級化でアメリカ的政治、 経済システム受け入れは可能か



しらいし・たかし

1972年東京大学卒業、74年同大学より修士号を取得。79年東京大学教養学部助教授、87年コーネル大学助教授、96年より同大学教授。98年より京都大学東南アジア研究センター教授。経済産業研究所ファカルティフェローを兼務。主著に『海の帝国、アジアをどう考えるか』『インドネシア 国家と政治』等。

国の戦略を考える際には国際潮流の見極めも重要になってくる。京都大学の白石教授は、「世界のアメリカ化」という視点で、いまの国際的な流れを見ていくべきだという。アメリカ化は、アメリカ「帝国」という形で、イラクへの介入を含め世界中に拡大している、ともいう。かつて英国がインド支配をした際、人種も宗教も異なるインドをイギリス化しようとしなかった。アメリカ「帝国」の場合、そこが決定的に異なる、という。

「帝国」という言葉には、大きく2つの意味がある、と言える。

1つは、本来の帝国の意味で、帝國的な主権とも呼ぶもの。国民国家システムの場合、主権は国民国家にあるはずだが、その

国民国家を超えたグローバルな規範のようなものが共有されてくると、規範の名において国民国家に介入する。そういう介入し得るような力を、インペリアル・ソブリンティイとか帝國的な主権と呼ぶが、国際秩序

というものをつかまえる概念として帝国がある、と考える。

イラクへの介入を含め、世界のさまざまなところで国民国家に介入するということ、はっきりと起こっているのも、その1つと言える。

アメリカ化を通じて 同盟国に外延的に秩序を拡大

もう1つは、この100年間、世界が非常にアメリカ化したこととからむものだ。

1920年代ぐらいにアメリカに登場した中産階級が世界的に広がり、中産階級を主体とする秩序が、少なくともアメリカとその同盟国で、かなりはっきりと力を持って成立し、それが外延的に拡大していく形でアメリカ化というものが進んできたことをいう。つまりアメリカを中心とした秩序というものが拡大し、安定してきた。

その場合のアメリカ化には、単に文化とか生活スタイルだけでなく、政治・経済システムも入っているが、アメリカ、西ヨーロッパ、そして東アジアに成立してきた中産階級社会、それを支えるシステムを帝国という言葉で呼んでもいいのでないか、と考える。

その帝国というものが、どういう構造を持っているのかが当然、次の問題になってくる。帝国には中心があり、その中心と同盟関係を結ぶ地域や国の周りには、いわば半周辺があり、その先には周辺があるだろう、という3層構造ないし4層構造で考えてもいい。

かつてラジオやT型フォード車というパッケージ、それが1950年ぐらいに郊外の芝生つきの家に車、テレビといった生活スタイルが世界に受け入れられていくというのが、私の言うアメリカ化で、それがまずアメリカで成立し、次第に世界に拡大していった。

ところで、アメリカの世界関与の根底には、いくつかの考え方がある。

世界は汚れており 新しい理想社会をつくる？

まず、アメリカというのは例外だという考え方と、アメリカは普遍だという考え方があり、それが裏表になっている。アメリカとしては、世界は汚れている、だから新しい理想社会をつくるのだという考え方と同時に、世界に関与していき、そこをアメリカ化していかなければならないという考え方の2つ。これが表裏する形で、アメリカのエクセプショナリズムとユニバーサルリズムがある。

さらにアメリカの世界関与の考え方として、リアリズムとリベラリズムがある。

このうち、リアリズムは、ナショナル・セキュリティの問題にはっきり出ていて、バランス・オブ・パワーでもって世界を見る。特に軍事面では、今のようにアメリカが圧倒的に強くなると、行動の自由を縛られたくないため、ユニラテラリズムでよいではないかという考え方になっていく。

それに対し世界にリベラルな秩序をつくるのがアメリカの利益であり、そのため

同盟国や経済をエンゲージしていかなければならないという考え方も一方にある。

これは裏返せば、エクセプションナリズムが強くなることもあれば、ユニバーサルリズムが強くなることもあるのと同じだ。

アメリカの政治は、世界との関係で常に揺れていくが、世界をアメリカ化していくということに関して揺るぎない、ほとんど疑問のない考え方が根底にある。それがアメリカ帝国の基本的なイデオロギーではないかと考えている。

旧ソ連は「ソ連人」づくりで 失敗したが…

旧ソ連は、冷戦時代に「ソ連人」というものをつくろうとして、見事に失敗したが、そのときに、それに対応する形で20世紀アメリカニズムというものが成立し、アメリカは、20世紀の「アメリカ人」をつくろうとする。その場合のアメリカ人は、アメリカという国民国家の国民であると同時に、普遍的な意味をも持つ人たちだった。

だから、アメリカの政策は、例えば日本とドイツに対しては、明らかにアメリカ化の政策だった。今、イラクでアメリカがやろうとしていることも同じだ。その場合のアメリカ化は、単に議会をつくって政治システムを民主化するだとか、あるいはマーケットエコノミーを導入するといったことにとどまるのではなく、イラク人そのものをいわばアメリカ人として変えていくという、極めて長期プロジェクトが前提としてある。

アメリカを、そういうものとして考えた方がよい、というのが私の考えだ。

冷戦初期に、西ヨーロッパの国々と日本は、アメリカとの間で非常に大きなバーゲンをやったように思う。1つは、ソ連という、資本主義システムやリベラルな政治秩序そのものを否定する帝国の脅威から守ってもらうのが、当時の1つのバーゲン。もう1つは、そのかわり、資本主義の国々や、その経済の中で、アメリカの優位を受け入れるということがもう1つのバーゲン。

この2つのバーゲンがパッケージになっており、それを受け入れたときに、いわゆる西側同盟というものが成立したと考える。同盟体制をどういう形で編成するか、西ヨーロッパの場合、集団的で、安全保障の面ではNATO、経済の方はEUになっている。

アジアでは「ハブ」と 「スポーク」基軸に

これに対しアジアではハブとスポークが基軸。安全保障体制が二国間のパイの関係として編成され、経済的には日本とアメリカと東南アジアとか、日本とアメリカと韓国といったトライアングルのシステム、寄せ集めの形で経済システムが編成されていた。

その結果、何が起こったか。アジアの場合、中産階級の成立があげられる。アメリカの、例えばインフォーマルな帝国が東アジアにおいてこれだけ受け入れられたということは、この地域に住む人たちがみんな豊かになり、これでいいでないかと思うか

ら安定している。

日本では1960年代から70年代の初め、韓国だとか台湾、香港、シンガポールでは70年代から80年代に、またバンコクとかクアラルンプールなどでは80年代から90年代にそれぞれ中産階級が成立し、今それが上海などに広がっている。波のようにして進む中産階級化がいわばアメリカの帝國的な秩序そのものが伸展と考えていい。

ただ、その場合、それが単なるアメリカ化だとは、もちろん考えていない。日本の場合でも、日本人が60年代から70年代にアメリカ的な生活様式を受け入れたが、我々がアメリカ人と同じような生活様式を持っているかという点必ずしもそうでない。むしろ、日本化したアメリカの生活様式を受け入れた。

アジアはハイブリッドなもので 重層的な中産階級文化

韓国の場合も、アメリカ化、日本化に加えて、韓国人たちはそれをもっとハイブリッドなものにしている。だから、東南アジアに行くと、それが同じように進み、極めて重層的な中産階級文化が成立している。

続いて、半周辺の問題に移ろう。そういった中で、地域というものをどういう形で形成してきたのかということが1つの問題になる。

冷戦終えん以降の世界秩序の基本的な編成単位というのは地域、地域システムではないのかと考えており、現に、地域システ

ムがそれぞれの地域にできているところもあれば、できていないところもある。

例えばヨーロッパにはEUとNATOを中心にした新しいシステムができ、今や同盟体制の再編成という問題になっている。これは、ヨーロッパの地域秩序だ。

東アジアにも新しい地域秩序というものが成立している。逆に中東などではそういう秩序というものは崩壊した状態になっている。

いわば世界秩序は、そういった地域秩序の寄せ集めとして見た方がよい。

その場合、日本が位置しているいわゆる東アジアにおいては、どういう地域、地域システム編成の特徴があるのだろうか。大きく3つぐらいの特徴がある、と言える。

アメリカ抜きにした秩序 考えられない東アジア

1つは、アメリカがつくり、現在も維持しているインフォーマルな秩序。特に安全保障の面におけるハブとスポークのシステム、それに経済ではアメリカが圧倒的なマーケットになっていること。アメリカを抜きにしては東アジアの秩序というものは考えられない、いわば特徴を持った秩序が第1。

2番目は地域の形成ということ。例えば東アジアという言葉1つとっても、20年前に東アジアと言えば、かつての中国文明圏が東アジアであり、東南アジアは東アジアとは違う地域と考えられていた。ところが、現在は東アジアと言うと日本、韓国から中国、東南アジア、これら全部を大きい



意味での東アジアと言うようになった。

この20年間で、言葉の意味が変わった最大の理由は、金融がグローバル化して、この地域をいわば1つの対象地域としてオペレーションをやるようになったこと。また生産面でも単に日本企業だけでなく、韓国や台湾の企業などが地域的なネットワークで生産するようになった。

3番目に、あらゆるところで中産階級が成立し「アジア人」という新しいアイデンティティーが、マーケットの力によってつくられるようになった。端的には、韓国の文化産業、テレビ番組の制作者は、韓国の国内マーケットだけでは小さいため、タイやマレーシアで売れるようなテレビ番組をつくらうとする。その結果、ジェネリックな（総称的な）アジア人というのがタイの

テレビ番組の主役になってきている。そういう中で、私は、例えば日本の漫画とかアニメとかファッションも売れるようになっていく。

タイ人が日本製の車に乗って、イタリア製の靴を履き、フランス製のスーツを着て、アメリカ式のステーキハウスに行っている。だが、タイ人としての個性がなくなることは全然ない。むしろ、ジェネリックなアジア人というものができてきている。これは、東アジアの地域化ということの3番目のポイントだ。

ジェネリックなアジア人？ が出来つつある

アジアにおいて初めて、単なるマーケッ

トではなくて、アイデンティティーのレベルで、ジェネリックなアジア人というものが形成されて、この2つの上に、多分政治的なプロジェクトとしてアジアの地域主義ということをやれるような条件が今できつつあるということがこの地域についてのポイントだ。

しかし今は、アフガニスタンではっきり出てきたように、テロリストのグループなどが入ってくると、それ自身が世界的な脅威になる。人がいろいろな形で流れてくる。だから、それはもう他人事では済まされなくなってくる。

そういう中で、人間のレベルでも「化外の民」というのが、はっきり出てきて、それから国家のレベルでも、ならず者国家だとか、破綻国家だとかいうものが、いわばそういう脅威として認識されるようになってきている。

いかにアメリカが強力だといっても、常に力の限界というものはある。力の限界のところで自分の思いどおりにならないものが出てきたということは見える。それが「化外の民」だとも言える。

中産階級になると 本当に「アメリカ人」になるのか

だから、何か客観的にそういうものがある、それも確かにそうなのだが、同時に、いわば認識の1つのパターンとして、力の及ばないところにはそういうものが出てくるということがそもそもある認識なので、これを全部平定して文明化しようなどとし

たら、とてもリソース（資源）は足りない。だから、結局それとは一緒に住んでいくしかない、我慢するしかないというのが、実は、もう1つの考え方だ。

アメリカの秩序というものは、今どういう形で成立しているのかというと、やはり明らかに中産階級の帝国という形で成立している。基本的なポイントは、要するにアメリカ人であるということが中産階級であるということであり、そういう基本的な考え方の中でとうとうとしたアメリカ化というものが進行している。

ただ、その中で、気になっていることは、それでは中産階級になるとアメリカ人になるのか、あるいは中産階級化することとはアメリカ化することかどうか、という点だ。

要するにアメリカ的な政治システム、経済システム、あるいは生活様式というものをいろいろな形でモディファイしながらでも、本当に受け入れていくのかどうか、というところがポイントだ。

その点で、アメリカ、ヨーロッパ、東アジアを別にすると、1つ大きな問題がある。

例えばイスラムに非常にはっきりあらわれているが、イスラムでは、神様は死んでいない。ヨーロッパの場合には神様は死ぬ。日本の場合、神様は、いっぱいおり、いてもいなくてもどうでもいい。しかしイスラムの場合、神様というのはいまだにいる。そういう中で、国家が破綻したり、あるいは国家が国民に正義を保障しないようなところでは何が起こるか。その場合、常にイスラムはコーランに戻る。要するにイ

スラムにとって、神の言葉は、絶対的な真理だから、そこからいろいろな答えを引き出そうとしてくる。

このあたりは、単に中産階級化すれば変わるという話ではない。

それは単にイスラムだけではなくて、例えばヒンズーもそうだとと言える。インドの中産階級化ということと、いわゆるヒンズー原理主義の問題とを、どう考えるかということだと思う。

そういう形で、必ずしも神の死んでいない地域があるため、中産階級化を通じて「アメリカ化」を促す20世紀アメリカニズムのようなものが、逆に大きな挑戦を受けるかもしれない。

それは単なる、例えばサミュエル・ハンティントンが言っているような非常にステイティックな「文明の衝突」の概念ではなく、むしろアメリカ化のプロジェクトが進めば進むほど、逆にそれに対する疑問や反発などが、極めてファンダメンタルなところで出てくる可能性があるのではないだろうか。

英国はインド支配で イギリス化など考えなかった

面白いのは19世紀のイギリス人は、世界をイギリス化しようなどということは、全然考えていなかったということだ。例えばイギリスのインド支配などを見ると非常にはっきりしている。インド人は違う人種であり、イギリス人みたいにしようなどということを考えること自身、妙な話だとなる。ある意味で非常に冷徹なりアリズムの

上に、イギリス帝国支配が成立していた。

ところが、アメリカ人は全く逆で、アメリカ人にしたい、アメリカという国自身がそういう国で、疑問の余地なく外に拡大していくのが、アメリカの基本的な帝国の特徴、とも言える。

その場合、イギリスは自覚して帝国建設をやったが、アメリカは、むしろアメリカ化という形で極めて無意識のうちに、善意でやっている。そこに両国の違いがある。

ジェネリックなアジア人のアイデンティティーを重視しているのは、そういうものが、20年前にはなかったことだ。しかし、これから20年ぐらいのうちに、ジェネリックなアジア人のアイデンティティーというのができてしまって、みんなそうだよなという形になると、それを踏まえてアメリカの政治的なプロジェクトは可能になるかもしれない。

これから21世紀の資本主義というものが、どのくらい活力を持ち得るかということにかかっていると思う。

アメリカニズムというのは中産階級化でもある、そしてアメリカニズムにおいてはアメリカ人と中産階級が、いわば同一視された。アメリカ化というのがそのプロセスだと言ったが、その基本にあるのは、やはり20世紀の初めにアメリカで生まれた資本主義だと言っている。

日本人とアメリカ人は 共有するもの増え似てくる？

いわば日本でも、日本的な形で採用さ

れ、ヨーロッパでもやはりヨーロッパ型の資本主義として採用されたが、しかしそれは大量生産型の資本主義として20世紀を席卷した。

今、ひょっとしたら新しい資本主義が生まれつつあるのかもしれない。だが、それがどのくらい力を持っているか。それにもよるが、中産階級化というものがこれからも進めば、20年とか30年のスパンで見た場合、人間というのはだんだん似てくるのではないかな、という気がしている。

例えば50年前と今を比べると、日本人とアメリカ人というのは、今の方がはるかにいろいろなものを互いに共有している。これから50年先、経済成長がある水準で続けば、ますます共有するものは多くなっていくだろう。だから、その意味で世界中の人たちは、だんだんよく似てくるだろうとは思っている。同質、均質化していくのかもしれない。

ただ、その中で、それではまったく同じになるかといえば、そんなことはない。

常に生活のスタイル1つとっても、そのハイブリッドなものは、それぞれの地域で出てくるだろう。そういう中でどこに、かなり重要なディバイドがあるかということを見ると、それは神が生きているか死んでいるか、といったことではないか、というのも1つかもしれない。

マクロで見ると、今は所得の格差はどんどん開いている。それでは第三世界の人たちが完全に貧しいところで運命づけられているかといえば、必ずしもそうではなく、やはり豊かな国の方へ来る。その意味で

は、必ずしも階級の問題は、そのものとしては大きな問題、世界そのものに対する脅威というふうには思わない。むしろ、それはある意味で、今のアメリカ的な、アメリカを中心とする秩序でもって、処理し得る問題ではないかという気がする。

仏社会学者がアメリカ自体のアジア化、ヒスパニック化を指摘

ところで、フランスの社会学者でバラダンという人が、帝国論のはしりの『自由の帝国アメリカ』という本を書いた。その中で彼は、アメリカというのは、これから例えば50年ぐらいのスパンで見れば、どんどんヒスパニック化するしアジア化するという。そうなったときに、例えばアジア・太平洋というのは、やはり人口学的にも、むしろ均質化の方向に行くという。

だから、今の私の持っているイメージで言えば、アメリカを中心に西ヨーロッパと東アジア、この地域はかなり人口的にも、アメリカのアジア化、あるいはアジアのアメリカ化が進行するのではないかと思う。

ヨーロッパもアメリカ化が進むと思う。ただ、ここは非常に短期的な話で、やはり冷戦の初期に行われたバーゲンが、もうバーゲンの条件というものはなくなった。旧ソ連というものはなくなり、別にアメリカによって何かの大きな脅威から守ってもらわなければいけないということはなくなってきており、少し意味合いが違っているかもしれない。

その意味では、まだ日本などは、東アジ

アの場合、北朝鮮（という脅威が）があるし、もっと大きい問題として中国の問題がある。中国がこれからどういう国家になっていくのかということを考えると、やはり日本などはアメリカに保護してもらわなければいけないということは非常に重要な問題になってくる。

ところが、ヨーロッパの場合、そういった脅威が本当になくなっている。そのときに、冷戦の初期につくられた同盟体制というものを維持することができるのだろうか、そういう国民的な説得ができるのだろうかということ、まだかなり大きな問題だと思う。

いずれにしても、この点は、イラクの問題をきっかけにして出てきた問題だが、本当に国民的合意が成立して新しい同盟体制ができるまでには、かなり時間がかかるのではないかという気がする。

中産階級社会崩れたらどうなるかは 今後のポイント

ところで、中産階級が崩れつつあるのでないか、という指摘がある。

これは、1つのポイントで、例えば日本の社会と、フィリピンだとかインドネシアの社会とが、何が違うかということ、フィリピンなどの場合、中産階級が空間的にも、英語で言うとゲートッド・コミュニティ、要するに何重ものゲート、門によって外の空間から完全に切り離されて、ニュータウンだとかレジデンシャル・エリアだとかいう形で、空間的に外から切り離された形で

成立している仕組みがある。

逆に言うと、フィリピンなどの場合、そのくらいに、下層の人たちからの恐怖がある。だから、その意味で、やはり階級の問題というのは、それぞれの社会においてはすごく大きな問題であることは間違いない。ただ、その対立が果たして深刻になっていくのか、それとも中産階級というものがそれなりに、例えば日本だとか韓国で起こったように拡大していったら、それで社会というものが安定化の方向に向かうのか。それは、経済がこれから将来、どうなっていくかということにかかっている。

アメリカ政治はアイデンティティー・ ポリティックス

アメリカのことに關していえば、アメリカというのは政治のレベルでは、やはりアイデンティティー・ポリティックスというのは物凄く大事だ。だから、アメリカ人というのはいつも何とか系アメリカ人という形で分類されるし、政治においてはそれが非常に大きな意味を持つということは間違いない。

ただ、私が考えるアメリカのイデオロギーというのは、それよりももう1つ上のレベルで、少なくともイデオロギーのレベルでは、アメリカ人になる。それはどういうことかということ、自分が、あるいは自分の先祖が持っていた言語だとか文化だとか慣習というものを振り捨てて、アメリカ的な生活様式を身につけていく。

その場合のアメリカ的な生活様式というの

は、何かモデルがあるのではなくて、要するにスタンダードパッケージというものがあるだけだ。ただ、車1つとっても、高級車もあれば安い車もある。アメリカの中産階級は、決して所得の水準で、みんなが同じ所得の水準になっているなんてことは全然ない。アッパー・ミドルクラスもロウアークラスもしくはミドル・クラスもパッケージとして持っているものは、アイテムとしてはよく似たものを持っている。それでみんな中産階級意識を持っている、ということだ。

日本の場合、そのところが、所得の問題と、かなりリンクしている。日本でも今、中産階級の崩壊などということが言われても、やはり意識のレベルでは、日本人というのは90%以上が中産階級だと思っている。それがあるといことは、日本の場合、やはり物凄く重要なことだと思う。

日本は外国にオープンにし 人材の世界調達を

日本で別な意味で重要なことは、日本はこれからますます高齢化し、少子化していくという点だ。これは厳然たる事実。それともう1つ、アメリカと日本を比べて、あるいはヨーロッパと日本を比べてもある程度言えることだが、今のようなグローバルな産業社会の中では、やはり人材のプールは広い方がよい。日本人だけで、たかだか1億数千万のプールの中から人材を調達するのと、世界中から調達するのだったら、もう最初から勝負はついている。

だから、その2つを考えると、高齢化、少子化を迎える日本は、人のレベル、人の移動のレベルで、外国に対して社会をオープンにしていくしかないのではないかと思う。

では、そのときに、それをどこに対してオープンにしていくのかということが現実問題となる。その場合、当然のことながら、やはり対象は東アジアにあるので、そこをオープンにしていき、本当に社会システムそのものをそこで組みかえていくようなことが必要なのかなという感じがしている。

例えば優秀な中国人はどんどんと採って、日本人になってもらえばいいということかもしれない。ただ、それをやるためには、やはり日本としてやるべきことが政府のレベルでいっぱいあることは言うまでもない。

ところで、このアメリカ化とのからみで、安全保障の問題を考えることも極めて重要だ。その場合、2つの大きい問題があると思う。

日本は総合安全保障に 取り組めるか

1つは、日本の場合、総合安全保障という言い方で言われている点だが、単に軍事的な意味での防衛、国防、それから日本がバイタルな利益を持つ地域における安定ということと同時に、例えば食料、エネルギーといったところをどうするか、いわば総合的に安全保障をどう考えるか、という問題がある。

もう1つは、軍事的な問題と同時に、テ

口のような問題とか、あるいはドラッグ、人身売買、さらには、小火器とか、いろいろな問題がある。だから軍事的な問題だけではなくて、警察的な問題も実は安全保障の問題として、無視できない問題だ。

この2つの問いに対して、どう答えを出すのかということが、安全保障を考えたときの一番大きなポイントではないかと思っている。

そのときに、今まで過去50年間、日本政府が出してきた答えは、要するに、日米安保中心で行こうということだった。だから、軍事のところでは日米安保中心で、冷戦が終わった後、特に最近になると、かつては格好だけしていればよかったけれども、今は本当に実質的に同盟国としての役割分

担をしなければいけないとなって、自衛隊などもかなりまじめにいろいろなことをやっているという、位置づけになる。

それをやっておけば、例えばエネルギー安全保障などについて、基本的にアメリカが同盟国・日本のことを面倒みてくれるだろうという期待を持つ。

食料安全保障というものに関して、農林水産省が考えている自給率確保などの考えとは違って、食料安全保障は、日米同盟を維持していれば大丈夫なんだ、というのが実は私の考えだ。

その意味で言えば、総合安全保障というのは基本的に日米同盟中心でないか、と思っている。(談)

